メアリー・シドニーとイギリス・ルネッサンス

—ペンブルック伯爵夫人の訳業をめぐって—

小　塩　ト　シ　子

序：

ヴァージニア・ウルフのあまりにも有名な「シェイクスピアの生きた時代にはものを書く女性が出なかった」という1929年の時点で出された仮説は，それ以来女性作家の仕事がさまざまな分野で発掘されて，今日では覆(くつがえ)されている。またジョーン・ケリー＝ガドル（Joan Kelly-Gadol）の問いかけ「女性にルネッサンスはあったか」に対する答えも近年，否定的なニュアンスは消えてなくなってきている。メアリー・シドニー（Mary Sidney，1561-1621）が出自からして当時のヨーロッパ大陸の文化的影響の下に生れ育ち，15才の若さでペンブルック伯爵夫人となってからは，ますますソールスベリー近郊のウィルトン・ハウスにあって兄サー・フィリップ・シドニーをはじめとする文人たちの集まるいわば小アカデミアをつかさどる人物となり，さらに兄亡き後はみずからペンをとる人となったことはよく知られるところである。

彼女をメアリー・シドニーの名で呼ぶのか，ペンブルック伯爵夫人として考えるのか，これは大方の場合どちらでも構わないということかも知れない。しかし，マーガレット・ハニーが『フィリップの不死鳥』(1)と題して大部の彼女の伝記を書いたとき，キャサリン・ダンカン＝ジョーンズは *TLS* の書評で，著者が一貫してメアリー・シドニーという maiden name でとおしているのはいかがなものかと，60年近い生涯のはじめの15年あまりしか用いなかった筈の名でとおして書いていることを問題にしていたのを記憶する。たしかに兄サー・フィリップ・シドニーはその長編ロマンス『アーケイディア』をいわば妹に捧げ，この作品の題名は *The Countess of Pembroke's Arcadia* となったし，兄

亡き後の活発で野心的とさえいえる活動は，すべて伯爵夫人のものである。しかしまた一方で彼女は，その活動の期間中ずっと兄フィリップとシドニー家との結びつきをつよく意識しつづけたこともたしかである。彼女の仕事のほとんどがフィリップに促されて始められ，完成されたものであることを考えれば，彼女は生涯をとおしてメアリー・シドニーと呼ばれ，後の世にも記憶されることを望んだかも知れない(2)。

ここでその呼び名に拘泥したのには理由がないわけではない。それはエリザベス朝のはじめから終わりへ，そしてジェイムズ朝へという大きな変化の時代のその過渡期にあって，女性としての限界を抱きつつも，恵まれた生の条件を活用して，メアリー・シドニーからペンブルック伯爵夫人へと成長し，この時代の変化に貢献した足跡をその後者の面に重点を置いてみておきたいと考えるからである。16世紀後半の，ものを書く女性のうち実質上もっとも多くを残した一人はメアリー・シドニーであろう。最近およそ20年間，イギリス・ルネッサンス女性作家の中で彼女は，とくに注目される学問的成果を生み出す対象となってきた。そのひとつの証しとして最近（1998）オクスフォード出版社からハニーの編集によって全集（二巻）が出版された(3)。そこではメアリー・シドニー・ハーバート，ペンブルック伯爵夫人と呼ばれている。

メアリー・シドニー・ハーバート（以下メアリー）は詩人として自作の叙情詩を書いたわけではなかった。現在わたしたちが読むことのできる詩は数篇にすぎない(4)。しかし『ダビデの詩編』の翻訳を兄フィリップの死後完成させた。またペトラルカの韻文詩『死の勝利』を訳した。自作の散文ロマンスを残したわけではなかったが，兄の未完の作品『アーケイディア』を編集し手を入れて出版させた。また自作の戯曲は書かなかったものの，ロベール・ガルニエのクローゼット・ドラマ『マルク・アントワンヌ』を訳している。神学的な論文を書いたわけではなかったが，フィリップ・ド・モルネの『生と死についての論考』を訳して発表した。これらすべて(5)は1580年代にはじめ，1590年代を中心にして1600年までには成し遂げている。このリストを一瞥しただけで，エリザベス朝にもこのように多産な女性作家がいたという明らかな証拠となるであろう。それに加えてウィルトン・ハウスに詩人・作家たちを招き，文化的に彼ら

を育てたメアリーのパトロンとしての活動も考慮すると，人並みすぐれた人物像が浮かび上がってくる。もっともウィルトンは，首都ロンドンとエリザベスの宮廷からは離れた場所であり，男性作家たちのように広く社会的また政治的な事柄にかかわることは少なかったから，その文学的な関心もおのずから限定され，創作ではなく翻訳を，また主題も内面に向かうもの，信仰や道徳といった重いものになることはあったといえよう。

小論はその翻訳を中心としたメアリーの仕事を概観するのを目的とするが，そのうちもっとも重要と思われる『ダビデの詩編』に重点をおき，エリザベス朝文化との関係の中で考察をすすめていく。

エリザベス女王の廷臣としてウェールズ長官であったサー・ヘンリー・シドニーとレスター伯の姉メアリーのあいだに生まれた子メアリーは兄フィリップに7年遅れて，弟ロバートより2年早く，ウェールズ国境の村で生まれ，ラドロー・カースルで育っている。カースルには古くからのチャペルがあり，日毎の礼拝がプロテスタント流に熱心になされていたという。やがてケント州のシドニー邸ペンズハーストで家庭教師による人文主義的教養を身につけた。1572年エリザベス女王のケニルワース訪問の際，宮廷にデビュー，75年にペンブルック伯ヘンリー・ハーバートと出会い，一年余りを経て77年に二人は結婚。時に伯爵は40代半ば，メアリーは15才，ソールスベリー近郊のウィルトン・ハウスがその住まいとなった。

一方兄フィリップは二度のヨーロッパ大陸旅行でその資質が認められ，全ヨーロッパにわたるプロテスタント同盟のイギリス側の推進役と目されるようになったが，宮廷での悶着やエリザベスの結婚問題に反対したことから，女王の反感を買い，1579年には事実上宮廷を追われることとなり，それからの数年間は文筆活動に励んでいる。舞台となったのはロンドンではレスター・ハウスで「アレオパゴス」と呼ばれた文芸サークルに，スペンサー，ハーヴェイ，グレヴィルといった文人たちが集まっていたことはよく知られている。またウィルトンにも頻繁に出かけ，滞在して（1579年から80年）長編ロマンス『アーケイディア』を書き，81年から83年にかけて文芸理論の書『詩の弁護』さらにソネ

ット集『アストロフェルとステラ』と続くが，やがて『アーケイディア』の改作に手を染め，未完のままネーデルランドにおける対スペインの攻撃のさなか倒れて死に至ったのが1586年である。メアリーにとってこの年は死の刻印を三重に身に受ける年となった。メアリーは結婚後1580年から84年のあいだに４人の子を出産したが，そのうち娘キャサリンを1584年に３才で失っている。86年には５月に父サー・ヘンリーを，８月には母レイディ・メアリーを天に送り，10月には最愛の兄を死が襲った。葬儀にも出席できぬほどの悲哀を味わったといわれる。まだ25才になったばかりであった。しかしメアリーはその後「不死鳥」のように立ちあがって，いわば亡き兄の後を継ぐ仕事をはじめるのである。

１）ガルニエの悲劇『マルク・アントワンヌ』(1578) の英訳 (*The Tragedy of Antonie*)：

メアリーのペンによる活動が本格的に始められたのは何時だったかを示す明確な証拠はない。しかし言えることは，兄の死後，残された作品『アーケディア』の出版に向けて編集が始まり (出版は1593年)，また兄の友人であったフィリップ・ド・モルネの著作の英訳が完成出版されるのが1590年となっている。一方でガルニエの悲劇の英訳は原稿の終わりに「1590年11月26日ラムズベリーにて」と書かれているのでこれは訳の完成の記録として読める。これらの日付を並べてみると，夫人は兄亡き後，その遺志を継いで著作に励むようになったとの推測が可能となろう。もっともそれは翻訳・編集といういわば間接的な表現形式を用いてであった。そしてそれが当時の女性にとって無理なく許された表現手段でもあったろう。

ガルニエの作品は，主題においても技法においても典型的なセネカ流のフランス古典劇であり closet drama である。情欲が英雄と国家とそして家庭を滅ぼし，内戦で民草が犠牲とされる悲劇。修辞法と三一致の法則を守り，長い独白と形式的議論を含む。それをメアリーが訳すに至った動機は何であっただろうか。兄フィリップが『詩の弁護』の中で，public theatre 向きではなく，'notable morality' と 'stately speeches' を含む古典的伝統作品(6)を称揚していることを考えれば，その主張を実際に表すのに適したものとしてガルニエの

当該作品を妹メアリーが取り上げたことは理解できる。実際シドニー・サークルの文人たちの作品中，トマス・キッド『コーネリア』(*Cornelia*, 1594ガルニエ作品の英訳)，サムエル・ダニエル『クレオパトラ』(*The Tragedy of Cleopatra*, 1594) (7)および『フィロータス』(*Philotas*, 1595)，フルク・グレヴィル『ムスタファ』(*Mustapha*, c.1599)などと並んで，公衆劇場での上演を意図せずに書かれたといわれる作品群に入るものと考えてもよいであろう。

ところでわれわれは，1592, 3年頃にペンブルック伯がその名を貸した劇団のことを知っている。Pembroke's Men である。たしかに小さな劇団であったし，やがて Lord Admiral's Men に吸収されたが，一時期であれ，パトロンとなったペンブルック伯とそれに近い文人たちが public theatre 拒否のために closet drama をこのようにいくつもものしたのであろうか。疑問としては残るであろう。一つ興味深いのはペンブルック伯夫人の訳したこの作品のペンズハースト MS にはト書きが入っているということであり，もしかすると，公衆劇場での上演ではなくても，単なる朗読作品ではなく貴族の邸の限られた人々を前にして演じられた可能性も否定できないであろうことである。

やがてシェイクスピアがその作品『アントニーとクレオパトラ』を，主としてプルタークの『英雄伝』に基いて書くとき，材源の一つとして役立ったと思われる，このガルニエの作品をシェイクスピア劇の筋立てと比べて簡単に述べておこう。

五幕仕立てであるが，筋書きの上では，アクティウムの海戦以降を扱う。アントニーがクレオパトラの裏切りを嘆く長い独白で劇は始まり，それを受けてコロスが人の世の常の不幸と無常を共々にうたう。また哲学者 (Philostostus) が，恋は国家を滅ぼし，民草を服従と隷属に向かわせると嘆く(一幕)。クレオパトラは海戦での自分の行為を悔い，アントニーの絶望を気遣う。チャーミアンとの対話で，チャーミアンはクレオパトラに対する忠告役として，アントニーから離れ，シーザーに従うように，子供たちのために生きよとすすめる。クレオパトラはアントニーが死ぬなら，自分にも死を，子の為でなく夫のために死ぬ，と激しく抗う(二幕)。アントニーの疑いと嫉妬。クレオパトラがシーザーになびくかも知れないと。ルシリアスがチャーミアンと同じような忠告役と

してアントニーと対峙する(三幕)。シーザーがアグリッパを相手に，アントニーのこれまでとオクタヴィアに対する不実をなじる。シーザーの自負。統治者のあるべき姿をめぐる議論(debate)。使者がアントニーの死を報じ，シーザーはクレオパトラを捕えて凱旋(がいせん)の飾りにしようと考える。ローマ兵たちのコロス(四幕)。クレオパトラの死の決意。子供たちの為に生きよとのユーフロンの訴え。クレオパトラと子の対話。アントニーの偉大さを告げる。アントニー讃。そして自讃，自死（五幕)。

三幕（1500～50行）の統治者論の中でシーザーの言う，統治者は一人であるべきで，安んじて生きる為に敵は倒さねばならぬという意見，また明らかに民衆蔑視の科白を書き込んだガルニエに，訳者が共感したのかどうか簡単に断言はできない。しかし，悲劇の主人公アントニーに寄り添う姿勢は作者と訳者が共有したのではないかと推測される。原作者ガルニエは，カトリック陣営の人として知られるが，彼の政治理論はラディカルというのではなく，権威に対する批判の目をもって過去の歴史に学びつつ政治の現状を改革する策を探るという姿勢をもっていた。ペンブルック伯夫人が原作者の歴史理解や，同時代向けのメッセージとしてどの程度の共感を持っていたかは定かではない。

原作にはないが，訳者メアリーが作品のはじめに付けた Argument には

> ... omitting his [Antony's] enterprise, he made his return to Alexandria, againe falling to his former loves, without any regarde of his vertuous wife Octavia, by whom nevertheles he had excellent children.(8)

という箇所があって訳者の女性的視点が見える。しかしこのオクタヴィアに対するある種の共感とも見える解釈が，アントニーとクレオパトラの愛の結びつきをいささかも損うものでないことも明らかで，原作中に見られるヒーローとヒロインの描き方や，クレオパトラとその子らとの対話をとおして二人の愛の，他の何ものにも替え難いものであることが示されているのである。

文体についていえば，訳にあたってメアリーは，ガルニエのフランス的韻文

体アレクサンドランを，コーラスを除いて無韻詩 (blank verse) の形に変えている。また二幕に見られるテンポの早いスティコミシアの対話部分は，荘重な全体に変化の効果をあげている。

本作品は，出版後15年間に五回の重版を見たところからすると，上演の意図の有無を問わずとも，作品として失敗とは思えない。『ダビデの詩編』と同じように，1590年代の政治状況を（ローマ史を用いて）寓意化して見せる手段としての作品という評価ができるとすれば，そういった作品群に先鞭をつけたといえる。その意味では兄フィリップの思想的骨格をなしていたプロテスタント・ポリティックスを継承したものと位置づけられるであろう。

またものを書く女性の歴史からいえば，このメアリーの仕事は翻訳ではあったが，やがてエリザベス・ケアリー (Elizabeth Cary, 1585-1639) が紀元一世紀のパレスチナ史（ヨセフス文書）を十七世紀イングランドに重ねて，女性ではじめての closet drama『マリアム』(*Mariam* 出版は1613) を書く，その道筋をつけたということもできるであろう。

2）その他二つの翻訳について：

メアリーの訳業として次にモルネ (Philippe de Mornay) の『生と死に関する論考』(*Discours de la vie et de la mort*) を取り上げよう。モルネはユグノーの指導者としてエリザベスの宮廷でも早くから知られていたが，メアリーの兄フィリップはパリ滞在中に交わりを結んでいた。のちにナヴァール王から遣わされて1577-8年，ロンドンに大使として滞在した時にも二人はきわめて親しい間柄となった。モルネの主要著作の一つでプロテスタント・キリスト教の本質を明らかにしようとした『キリスト教の真正性について』(*De la verite de la religion chretienne*) をフィリップは広く人々に読んでもらいたいと願い，英訳をしている(9)。公私共に近い関係にあったモルネの諸著作のうちから，メアリーが兄の死後『生と死に関する論考』を訳すようになったのには，近親の死が重なった前出のような個人史的な動機があったのかも知れない。あるいはまたモルネのもう一つの翻訳が完成せずに兄が逝ったことや，のちにモルネ夫人がメアリーに英訳をすすめたことなども考えられよう。また一般的に言って

も，ルネッサンス期の女性たちにとって子を産み育てる苦労はいつも死と隣り合わせであったから，生と死の問題に関心を寄せるのも当然であったろう。

モルネの *Discours* は一言でいえばキリスト者にとっての *ars moriendi* すなわち 'art of dying' をストア哲学の用語で説いたものということができる。1576年にフランスで出版され，すぐにイングランドでも出版と印刷業で知られるエドワード・アガス (Edward Aggas) が，『死の弁護』(*The Defence of Death*, 1577) と訳して出版している。従ってメアリーの訳 (1590) は，はじめてのものではないが，他の訳業でも見られるように，彼女はフランス語の原文とアガスの訳を見ながら，新しくよりよい訳を心がけている。『詩編』訳より10年も前のこの翻訳の仕事で，メアリーはすでにその訳者としての才能を示した。アガス訳とメアリーの訳を原文と並べて比較し，後者がなめらかで読み易い英文になっていることを例証したボーンスタインが，

> One can only regret that the countess limited herself to the silent art of translation and did not write her own meditations. (10)

と言っているのも首肯できるであろう。

もう一つの訳業ペトラルカの『トリオンフィ』(*Trionfi*) シリーズの一つ *The Triumph of Death* が主題の点でモルネの死生論と結びつくのでここで触れておく。ペトラルカは周知の如くソネット連作『カンツォニエーレ』の詩人としてイギリス・ルネッサンスの詩人たちに絶大な影響を与えたが，*Trionfi* 六篇（「愛」「貞操」「死」「名誉」「時」「神意」を扱う）も当時人気のあった作品である。暴君である愛神 (Love) は詩人を征服するが，ただラウラの貞操 (Chastity) のみ愛神の情愛を超える。死 (Death) はしかしその貞操に勝利するものであり，死に勝つのは名誉 (Fame)。その名誉も時 (Time) の利鎌に倒れるが，ついに神意 (Divinity) のみこれ (Time) を征服するというこの詩のパターンが流行となった。訳業の正確な時期については解らないものの，後になって『詩編』訳と共に言及されたり，束ねて贈り物とされたりしている記録があるところから，1590年代になされたことは間違いない。詩形は原作の terza rima を活

かして用い，できるだけ原文に忠実な字義どおりの英訳を試みている。

Vertue is dead ; and dead is beawtie too.
And dead is curtesie, in mournfull plight.
The ladies saide : And now, what shall we doe ?
Neuer again such grace shall blesse our sight
Neuer like witt shall we from woman heare.
And voice repleate with Angell-lyke delight.(11)

ペトラルカにとってラウラの死は美と徳の死であり，二度とふたたびラウラのような優しい顔容(かんばせ)を目にすることも，並はずれて美しい声に接することもできない。詩人は寄りすがって言う，

My Goddesse, who me did and doeth reuiue,
Can I but know ? (I sobbing answerd)
But art thou dead ? Ah speake or yett alive ?
Aliue am I : And thow as yett are dead.
And as thow art shalt so continue still
Till by thy ending hower, thow hence be led.
Short is our time to liue, and long our will :
Then lett with heede, thy deedes, and speaches goe
Ere that approaching terme his course fullfill.

ラウラはペトラルカのソネット群に描かれるように物静かでことば少ない女性ではない。'chaste heart', 'faire visage', 'upright thought', ことのほか '*wise speache*' をもつ女性である。詩人が，残り少ない時間に語るべきことを求めると'She parting saide, As my coniectures are / Thow without me long time on earth shalt staie.'と言ってこの詩は閉じられる。

この訳が世に出た後ほどなくしてメアリーの姪 Mary Wroth が，イギリス

女性作家によるはじめての喜劇 *Love's Victory* を書いたが，題名の『愛の勝利』ばかりでなく，その主人公たち Phillissas と Simeana が伯父と伯母の名のアナグラムから成っていることは影響の濃いことを思わせて興味ぶかい。

以上でメアリーの翻訳については『ダビデの詩編』をのぞいてすべて概観したことになる。しかしメアリーがおそらくは自らの生の証しとして，もっとも力を入れた仕事は，序にも記したようにこの『詩編』であったろう。Simon van de Passe の肖像に見られるように，(12)手に持つ『ダビデの詩編』がペンブルック伯夫人の自信を表しているではないか。そこでわれわれはこれを次に取り上げることになるのだが，まず遡ってイングランドのルネッサンス・ヒューマニズムと宗教改革の状況を見ておかねばならない。

3）イングランドの宗教改革と聖書の翻訳：

イタリアにはじまったルネッサンスが，どちらかといえば異教的，現世的，自然主義的傾向が強かったのに対して，北ヨーロッパのそれはキリスト教的要素が強かったといってよい。イングランドのルネッサンスに先鞭をつけたといえるコレット，エラスムス，モアといった人々を見ればそのことは明らかであろう。コレットはイタリア留学から帰ってオクスフォードで新しい聖書解釈のモデルを打ち立て，のちにロンドンでセントポール司教座聖堂首席司祭となり，グローシン，リネカー，モアそしてエラスムスなどと交わって人文主義時代をもたらした。すでにこの頃イングランドにはヒューマニズムと同時にある種の宗教改革の精神の芽生えを見ることができる。

一方，ルネッサンスの人文主義を語る時，古典古代の復活がテキストの現代化すなわち自国語への翻訳を必要不可欠な条件としていたことはいうまでもない。近代初期，イングランドはテューダー朝の新しく目覚めた国民国家意識と重なって，自国語（英語）の確立，英詩，英文学の確立の運動とおびただしい翻訳がなされる時代であった。なかでも聖書の翻訳は，早くはジョン・ウィクリフのがあったが自国では受け入れられなかった。テューダー朝に入ってマイルズ・カヴァデイルやウィリアム・ティンダルの訳した聖書は両者共ヨーロッパ大陸でルターによってはじめられた宗教改革の影響をつよく受けて成し遂げ

られている。

周知のように本国イングランドで行われた宗教改革は，ローマからの離反を端緒としており，官主導のものであった。従って国王首長令が出され，国教樹立にあたって聖書そのものも，ローマ・カトリックのラテン語聖書ではなく国教会用のものを要する必然性はあった。そこで英語の『大聖書』(*The Great Bible*, 1539) が生まれた。大型二折(フォリオ)本だったのでこの名がある。一方一般的にも，宗教改革の精神の根底には先に挙げた近代的国民国家の意識の芽生えがあって，聖書を自国語で読むだけでなく，教会での礼拝や聖餐式も，理解できないラテン語でなされるのではなく，英語でという願いがあった。これを背景にイングランドの宗教改革者たちは，自国語による礼拝式の確立をめざした。先に，1539年にはヘンリー八世治下，トマス・クロムウェルの指示でティンダル，マシューによる英訳聖書にカヴァデイルが編集し手を加えて，すべての教会に置かれるようにと出版されたのがこの『大聖書』であった。そしてその1540年版にはカヴァデイル訳の「詩編歌」(*Psalter*) も付けられた。エドワード六世期の1549年に，「礼拝統一法」に基いて礼拝式文をまとめた形の『祈禱書』(*Book of Common Prayer*) が出る。これらは神礼拝への一般信徒の積極的参加を促す意味を持つものとして注目される。

エリザベス朝に入って，英訳聖書で大きな影響力をもったのはなんといっても『ジュネーヴ聖書』(*The Geneva Bible*, 初版1560) である。当時カンタベリー大司教マシュー・パーカーを中心として，先の『大聖書』の改定を目的とした『主教聖書』(*The Bishops' Bible,* 1568完成・出版) が平行して訳されていたけれども，影響力ではジュネーヴ聖書がこれをはるかにしのいだ。(カトリックの訳としてリームズ・ダウェイ版(*Rheims*＝*Douei* 新約1582, 旧約 2 巻1609-10)があるが，ここでは主としてプロテスタントの英訳聖書について論じる。)

英訳聖書の歴史においてもっとも画期的な業績といえるのは1611年の『欽定訳』(*Authorized Version of the Bible*, アメリカでは *King James' Version* と呼ばれる) であり，これは先達とくにティンダルの英訳に負うところ大であったが，それ以前の数十年間さかんにヘブル語ギリシャ語の原典や，ラテン語訳『ヴルガタ』(*Vulgate*) から英語に移されたもののうち，とくに宗教改革が

推進されていく中でカルヴァンの影響下で生み出された『ジュネーヴ聖書』はプロテスタントの精神を反映した英訳聖書として重要である。

エドワード六世の治世に急速にすすめられたイングランド国教会のプロテスタント化が，次のメアリー女王の時代に入ってカトリックによる反動が支配的となって，多くの聖職者は迫害を逃れて大陸へ渡った。その頃スイスのジュネーヴはカルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564)を中心とするプロテスタンティズムの牙城であった。そしてイングランドから渡った上記の人々はカルヴァンの影響下にあって熱心に聖書の英訳に従事していた。ジョン・ノックスはスコットランドからジュネーヴにきて，「この町こそ真のキリストの学校」であると言って，そこでEnglish Churchの牧師となっていたし，イングランドからの亡命者の一人オクスフォード大学オールソウルズのフェローであったウィリアム・ウィティンガムが中心となって新約聖書の研究と翻訳を試みていた。彼はカルヴァンの諸『註解』，カルヴァンの同労でもあり後継者ともなったテオドール・ド・ベーズ（Théodore de Bèze, 1519-1605）のラテン語テキストなどに学んで，やがて1560年『ジュネーヴ聖書』の第一版を出版する。この英訳聖書の際立った特色は欄外のコメンタリーに見られるプロテスタント的な解釈であった。出版に当たっては当地にあったジョン・ボドレー（John Bodley）が資金を調達した。彼はオクスフォードのBodleianの創始者Sir Thomas Bodleyの父にあたる人物である。この初版は四折(クォート)本で，イギリスでもただちに好評をもって迎えられ，評価されて，翌1561年には二折(フォリオ)本となった。さらにエリザベス女王から，以後七年間の独占出版権を得ているほどである。

時は下って1576年この『ジュネーヴ聖書』の「新約」の改定版がローレンス・トムソン（彼はサー・フランシス・ウォルシンガムの秘書でもあった）によって世に出るが，これはずっと後まで『ジュネーヴ聖書』の新約部分として印刷されていくことになる。

やや長くジュネーヴと英訳聖書について述べたが，この時代に影響力をもつ聖書は，しかし国教会用のものではなかったことを付け加えておかなければならない。けれどもまた同時に言っておくべきかと思われるのは，前述の『主教聖書』がカンタベリーの主教であったマシュー・パーカーを頭に，ほぼ同時期

に時間をかけて編纂されたいわばライバルともいうべきものであったのに，結局この『主教聖書』はエリザベス女王の公認を得ることはなかった点である。女王は『ジュネーヴ聖書』の方が学問的に高いと認めたのであろうか。信仰・宗教・教会の問題について左右の極端を排し，国民大多数の同意を得ることを建て前として「中道」を探った女王は，教義上はプロテスタント的，礼拝様式は多分にカトリック的なものを認めたことは事実であった。

4）イングランドにおける詩編歌：

次に，翻訳一般についてと並んで，特に旧訳聖書の中の「詩編」の翻訳がこの時代にきわめて多かった点についてその意義を考察し，シドニー兄妹の詩編訳に道筋をつけよう。

詩編（Psalms）は，もとギリシャ語の「プサルモス」からきており，一種の弦楽器の響きを表すことばで，つまりは「うた」，聖書では「頌歌（たたえうた）」にあたるといってよい。旧約聖書の中でも特異な書物といえる「詩編」（当時は「ダビデの詩編」といわれていた(13)）は，宗教改革の時代とくにヨーロッパ大陸でもイングランドでも，新しくそれぞれの国で翻訳され，散文訳は礼拝式の中で読まれ，韻文訳には曲をつけて讃美歌としてうたわれるようになった。ドイツにおけるルターや，ジュネーヴのカルヴァンとクレマン・マロおよびテオドル・ド・ベーズの詩編歌などはよく知られている。これについては後述するが，イギリスにおいてもプロテスタントの讃美歌はまさにこの「詩編」の英訳からはじまったといってよい。

旧約聖書の中で「詩編」は，他の部分が神の人に対する語りかけであるのに対して，人が神に向ってなにを，どのように語り，祈り，讃美すべきかを教えている，と言ったのは，ベーズであった。そのような神への応答として礼拝の中で，人々が詩編を讃美歌としてうたうことが重要な位置を占めるようになった。中世以来ラテン語で讃美の歌をうたってきた人々は，新しく宗教改革後の教会で，自国語による詩編を朗詠し，また英語の詩編歌を讃美歌として歌うようになったのである。

聖書の翻訳の中でもとくに『ダビデの詩編』の翻訳（散文訳ばかりでなく韻

文訳も）が非常に多く世に出たのには，上のような事情があったが，さらに見ていくと，この旧約の詩編がプロテスタントの信仰の教義と礼拝に用いられるための翻訳と，より広く詩としての価値ゆえに注目され，翻訳されたものがあったことが分かる。この二つの傾向を境界線を引いて分類することは不可能であるし，あまり意味のないことであろうが，われわれの主題であるシドニー兄妹の訳業という点に関連して，事実このような二つの方向があったことは断っておかねばならない。

さて，この二つのうちの前者すなわち公けの礼拝式で用いられた詩編は，『大聖書』の1540年版にすでにカヴァデイルの詩編歌が付けられたことを前述したが，1549年以降用いられてきた『祈禱書』に，詩編は150篇すべてが付けられている。

一方エドワード治世には，詩人でもあったロバート・クローリー（Robert Crowley）が，バラッドの変型を用いた翻訳をホーバンの本屋から出し（1550），王立チャペルのメンバーであったウィリアム・ヒュニス（William Hunnis）も「詩編」訳を出した（1550）。

メアリー・テューダー時代，信仰上の亡命者たちは，改革途上の大陸でさかんに歌われていた詩編歌(14)に感動を覚え，母国に戻った時，このジュネーヴで得た経験をロンドンでもまた地方でも応用し，礼拝のあと広場で老若男女そろって詩編をうたったという。この時用いられたのはスタンホールド・ホプキンズ・ウィティンガムの「アングロ・ジュネーヴァン・ソールター」（*Anglo-Genevan Psalter,* a collection of 51 metrical psalms, 1556年）であったが，1562年には韻文訳の全150編を集めた『詩編歌集』（*The Whole Booke of Psalmes*）が出て，このスタンホールド・ホプキンズ版といわれるものが以後ずっと後に（1696年）テイト・ブラディの新版（Tate and Brady's New Version）が出るまで国教会で用いられ，これに並ぶものはなかった。

エリザベス朝の初期はとくに，会衆が礼拝の中で詩編歌をうたうことは奨励されていたようで，これはジュネーヴの影響の大きさを示すものであろう。そしてこのスタンホールド・ホプキンズ版は，ballad metre（common metre）による会衆向きの訳として知られる。もっともその翻訳の詩的な価値について

は，後述するようなジョン・ダンなどの手きびしい批判があり，そのためもあって，詩人たちが公用ではなく私的な礼拝用に，また詩としての翻訳を多く試みることになった(15)。

元来，聖書の翻訳についてはメタフレイズ（字義どおりの訳）とパラフレイズ（意を体して訳すしかた）の二つがあるといわれるが，現実的に詩編の翻訳はこの二つの間のどこかに位置する。かくしておびただしい数の詩編訳が残されることになったが，一方で厳密に聖書の語句に忠実であろうとする訳から，他方で詩編各編の全体の趣旨を汲んでかなり自由な訳，詩として再構成し朗誦するもの，そして曲をつけ歌うものまで多種あった。

このようにイギリスの詩編歌に影響を与えたのは，大陸では，ドイツのルター派（ルターも詩編の韻文化，パラフレイズ，コラール化，作曲などをすべてしているが）というよりむしろ，フランスのカルヴァン派であった。もっと遡ってみると，これら宗教改革の先達より以前に早く，例えば，ワイアットやサリーが詩編の自由なパラフレイズを試みている。ワイアットは1536年イタリアでアレティノの散文訳「悔い改めの詩編」を知り，やがてフランスに行って1539年クレマン・マロの「詩編」を知ることになり，後にワイアット自身が「七つの悔い改めの詩編」を訳した(16)。

ここでマロについて触れておく必要がある。フランスの宮廷詩人マロ（Clement Marot, 1497？-1544）はカルヴァンと出会う前から詩編のフランス語韻文訳をつくり，バラードやロンドといった世俗の曲に合わせて歌わせたが，プロテスタントであるとされて追われ，北イタリアのフェラーラに逃れた。そこは当時ユマニストの教育を受けまた宗教問題にも関心をもって亡命者を庇護したルネ・ド・フランス（ルイ十二世の娘）が，その宮廷を一種福音主義的なサロンにしており，マロはこの公妃の書記となった。そこへカルヴァンが来て，二人は親交を結び，やがてカルヴァン・マロの『詩編歌』（1533）が生れる。さらに1539年カルヴァン自身の歌集を経て，全詩編のうちマロが完成できなかった部分をテオドール・ド・ベーズ(17)が韻文化し，1562年に全150篇の『詩編歌』として出版，以後重版1000回を数えたという。

『ジュネーヴ聖書』がカルヴァンその他の改革者の影響下で生れたのと同様，

詩編歌も，このようにマロとベーズを含む改革派の色濃いものがイングランドに移されたのであるが，ここで強調しておきたいのは，宮廷詩人マロの詩編の韻文化が当時のフランス語（口語）を用い，また曲にも世俗的なものを取り入れたこと，カルヴァンの同労また後継者となった貴族的出自をもつベーズのコメンタリーや詩編韻文訳が，カルヴァンその人のむしろきびしい改革派精神そのものだけでなく，豊かに人文主義的な要素をあわせもった形でイングランドに伝えられたことであった。

シドニーの仕事を考える場合，このことはとくに重要であると思われる。

5）シドニー兄妹の詩編訳：

サー・フィリップ・シドニーとその妹メアリーの共同作業となった韻文訳『ダビデの詩編』が完全な形で世に出たのは，驚くべきことに1823年（Chiswick Press から）であった。とはいえそれは早くから親しい友人たちばかりでなくかなり広く知れわたった訳であった。多くの言及がサムエル・ダニエル，ジョン・ハリントン，ベン・ジョンソン他によってなされている。そのうちもっともよく知られているのは，ジョン・ダンが賞賛の詩を書いて，当時あまたあった英訳詩編の中で「詩」としてすぐれているのを示したことである。

...
When I behold that these Psalms are become
So well attyr'd abroad, so ill at home,
So well in Chambers, in thy Church so ill,
As I can scarce call that reform'd untill
This be reform'd ; Would a whole State present
A lesser gift than some one man hath sent ?
And shall our Church, unto our Spouse and King
More hoarse, more harsh than any other, sing ?
For *that* we pray, we praise thy name for *this*,
Which, by this *Moses* and this *Miriam*, is
Already done ; ...

'Upon the translation of the Psalms by Sir Philip Sidney, and the Countess of Pembroke his Sister' 37-47

「詩編」がヨーロッパ大陸では美しい装いをつけているのに，わが国の教会では，はなはだ粗末（'ill at home', 'in thy Church so ill'）だと非難されているのは当時一般受けしていた文字どおりの訳と単純な韻律で公共の朗読用のスタンホールド・ホプキンズ版を指している。「これが改良されなければ，わが国の教会も改革されたとはいえないだろう。…だが感謝しよう。われらのモーセとミリアムがもうすでに詩編を訳したのだから」と詩人ダンは喜び，この詩編訳を称えている(18)。

ところでサー・フィリップ・シドニーは『詩の弁護』の冒頭近くで，詩人とは（ギリシャ語ポイエシスから）'Maker'であるという命題を掲げているが，それに先立ってダビデにふれ，ローマ人たちの間では詩人は'Vates'すなわち預言者'prophet'だともいう。

… And may I not presume a little further, to shew the reasonableness of this word Vates ? And say that the holy *Davids* Psalmes are a divine Poem ?(19)

ダビデの詩編が'divine poem'でありながら，また人の喜びや悲しみの瞬間をみごとに適切な表現で示していることをなによりも高く評価していることから考えて，早くから詩編の翻訳には関心があったと思われる。若い頃からシドニー兄妹は，教会でも，また個人レベルの礼拝でも散文訳のPsalter（祈禱書につけられた）は暗じていたのではないだろうか。それだけに余計，自分たちはすぐれた韻文の訳を試してみたいと考えて，二人はじっさいに共同の作業をしていたのであろう(20)。

シドニー兄妹が早くから詩編の英訳を考えていたであろうことは，シドニー家のフランス改革派との結びつきの糸をたぐり寄せることによって証明されるかも知れない。父サー・ヘンリーはエドワード治世下に（1551-2）フランス宮

廷に遣わされていて，その頃すでにパリでマロの詩編歌が盛んに歌われており（カトリック側の反対を激しく受けていたが），やがて後マロ・ベーズの「詩編」が出た時（1562）ふたたびフランスにあったので，これを入手し持ち帰って，ペンズハーストでまだ幼い子供たちと歌ったにちがいない[21]。さらにシドニー家のラドローにおける礼拝の習慣については記録されたものによって伺い知ることができるが，詩編を賛美の歌として礼拝の中で歌う習慣が際立っている。この場合英語の詩編は例のスタンホールド・ホプキンズのものであった筈だが，すでに述べたように平易ながら詩的な価値の低いこの版と彼らはマロ・ベーズの「詩編歌」と比べながら，やがては自分たちでもっとすぐれた「ダビデの詩編」をつくろうと願ったのであろう。

この文学的な動機づけと同時にまた，シドニー家の系譜には，はっきりと宗教改革の精神とその流れに棹さす意味での政治的な動機づけもあった。フィリップ・シドニーが長じてエリザベス女王の時代に大陸へのグランドツアに出て，パリで，後にフィリップの岳父となる大使ウォールシンガム (Sir Francis Walsingham) のところに滞在し，「バーソロミューの虐殺」(St. Bartholomew's Day of Massacre) を目の当たりにし，ランゲ (Hubert Languet) やモルネと親交を結んで，フランス・ユグノーとプロテスタント改革派の現状を身をもって体験したことが，のちにシドニーの政治的立場を決定したことは周知のところである。

サー・フィリップ・シドニー研究の分野で，政治的文脈をテキストに読み込む傾向が最近つよく見られるのと同様に，メアリーの訳業にもエリザベス女王とその統治の在り方についてのコメントを読む，すなわち政治的意図が込められているとする解釈があるが，むしろここではメアリーの詩編訳の文学的側面について，とくに際立つ特徴を二，三取り上げるにとどめる（兄妹の訳した全詩編について詳しく論じるのは，後日を期したい）。

そこでまず何よりも，メアリーが詩の形を内容に従って変化させ決定していること，そこでそのためにきわめて多くの stanza form を用いている点が挙げられる。1998年版の『全集』には詩形の一覧表があり (469-483頁)，poetic form は126に及ぶ。またフリアによれば[22]，メアリーは訳した詩編107篇の中で71の

形式を使っているという。 Stanza form， poetic form だけでなく，韻律 rhyme にもさまざまな工夫をこらしている。"The Old Version"と呼ばれるスターンホルド・ホプキンズ版が common metre を重ねていくいわば単調な（歌うには適しているものの）形を取っているのに対して，一篇一篇内容に適した形を求めて訳しているのである。むろん散文訳の『大聖書』や『祈禱書』の詩編と比べてみれば，この特徴ははっきりする。57篇を例に stanza form を見よう。

Thy mercie, Lord now thy mercy show,
On thee I ly
To thee I fly
Hide me, hive me as thine owne,
Till these blasts be overblown,
Which now doe fiercely blow. (メアリー訳1-6)

これに対して『祈禱書』では

Be mercy full unto me (O GOD) be mercyfull unto me, for my soule trusteth in thee： and under the shadowe of thy wynges shalbe my refuge, untyll this tyranny be overpast.

となっている。また59篇の一部を "The Old Version" と比べてみると，

Now thus they fare； when sunn doth sett,
Retorn'd againe,
As hounds that howle their food to gett
They runne amayne
The city through from street to street
With hungry mawes some prey to meet.

Abroad they range and hunt apace
　　Now that, not this,
As famine trailes a hungry trace ;
　　And though they miss,
Yet will they not to kennell hye,
But all the night at bay do lye. (59 : 67-78)

おなじ箇所が "The Old Version" では次のようになっている。

At evening they return apace,
　　As dogs they grin and crie :
Throughout the streets in every place
　　They run about and spie.

They seek about for meat, I say,
　　But let them not be fed :
Nor finde a house where in they may
　　Be bolde to put their head.

ここには詩形ばかりでなく，生き生きと表現するために比喩を拡大する工夫が見られる。また兄フィリップが好んだことば遊びや，原典の技法（平行法や前辞反復）も活用される。

Mark what thou hear'st, and what thou mark'st obay (45 : 38)
Thie beautie shall both breed, and bredd, maintaine (45 : 42)
For I, alas, ackowledging doe know
　　My filthie fault, my faultie filthiness...(51 : 8-9)
And so him self most terrible doth verify,

In terrifying kings, that earth do terrify. (76：29-30)

また，より口語的な表現や呼びかけのしかたでメアリーらしさ，もっと言えば女性的な言語感覚を示しているように思われる部分がある。

Play, sing, and daunce. Then unto him, I say.
Unto our God, nam'd of eternall essence,
Present your selves with song, and daunce, and play. (68：6-8)
Tyrant, why swel'st thou thus, (52：1)
What? And doe I behold the lovely mountaines, (121：1)

58篇についてはラスメルが，『祈禱書』の散文訳，『ジュネーヴ聖書』『主教聖書』スタンホールド・ホプキンズ版，サンズ版，テイト・ブラディ版，アイザック・ワッツ，クリストファー・スマート，キブルなどの訳を併置してみせてくれるが(23)，メアリーの訳ははげしく敵を糾弾するマキャベリ的なイメジに混って 'still-born child'，'embryo'，'snail' など独特な表現を展開して，背後に女性の体験を暗示している。

117篇はダビデの歌う讃歌であるが，これをメアリーは次のようなアクロスティックの詩形で訳す。

P raise him that ay
R emaines the same：
A ll tongues display
I ehovas fame.
S ing all that share
T his earthly ball：
H is mercies are
E xpos'd to all：
L ike as the word

O　nce he doth give,
R　old in record
D　oth tyme outlive.

これこそメアリーがダビデの讃歌にひたと心を寄せて訳した例といえよう。

シドニーが先述の『詩の弁護』の部分で，ダビデのしばしば用いるレトリック擬人法 'prosopopoias' について触れ，あたかも神がわれわれの目の前におごそかな姿で現われ，野のけものらは喜びに打ちふるえ，山々も踊る姿をダビデがうたっているという。まさに天を思わせる詩であり，詩人ダビデは詩編において，信仰によってとぎすまされた心の目で見た永遠の，ことばに言いつくせない美を，はげしくいとおしんでいる，おのれ自身の姿を示している。この詩人像こそメアリーが訳すときの願わしい姿でもあったろう。メアリーもその詩編をできるだけ原典の意図するところに忠実にしかも詩として美しい自国のことばに移して示したいと願ったにちがいない。とくにこの最後の例（117篇）を見ると，やがてハーバートの家系に繋がる17世紀の詩人ジョージ・ハーバートの詩に直接受け継がれるものであることをつよく感じるのであり，このことは早くから Lily B. Campbell や Louis Martz や Barbara Kiefer Lewalski が認めているところである[24]。

ところで『ダビデの詩編』の英訳は，この後歴史とともに二つの方向を辿ることになる。一つには，これが韻文の「詩」として命を保っていく方向で，ジョン・ダンやジョージ・ハーバートそのほか多くの十七世紀の religious lyric を生み出す。二つには，Tate-Brady の "The New Version"（1696）を経て十八世紀には，アイザック・ワッツが多くの讃美歌をつくったことに表れているように，「詩編」そのものを歌うのに代わって hymn-singing が今日まで慣わしとなる。

このように見てくると，メアリー訳の『ダビデの詩編』の持つ文学上の意味が，これまで看過されてきたこと，兄フィリップの仕事に優るとも劣らぬものであったことが明らかであろう。その点でもメアリーの訳業は，次代に向けて架けた橋として記憶されてしかるべきなのである。

おわりに：

イギリス・ルネッサンスの盛期にさしかかる十六世紀後半にものを書いた女性のなかでもメアリー・シドニー・ハーバート，ペンブルック伯爵夫人は，さまざまな困難（階級，宗教，政治上の）を抱えていた人々と比べれば，恵まれた条件のもとで著作と活動ができて幸運であったといえよう。もっとも兄サー・フィリップ・シドニーと同様，エリザベス女王とその宮廷との関係では政治的にかならずしも期待や野心に見合う実りは得られなかったが。ペンブルック伯爵夫人の活動のうち，文芸サークルのパトロンとして中心的役割を果たしたことや，プロテスタンティズムの推進のために果たした役割については，よく知られているものの，夫人の訳業についてまとめられることは少なかった。特にその文学的な側面に光をあてることによって，この小論が今後進められるであろうメアリー・シドニー・ハーバートの全体像の研究に役立つようにと願いつつ，筆を置く。

（注）

1 Margaret P.Hannay, *Philip's Phoenix*：Mary Sidney, Countess of Pembroke. (New York： Oxford U.P.,1990)

2 Salsbury Cathedral にある彼女の墓碑銘（かつてはBen Jonsonが書いたと考えられたが，今ではWilliam Browne作といわれる）に，'Sidney's sister, Pembroke's mother'と記されている。

3 Hannay et. al. eds., *The Collected Works of Mary Sidney Herbert,Countess of Pembroke,* 2vols. (Oxford： Clarendon Press, 1998) OETシリーズに加わった。

4 'A Dialogue between two shepheards, Thenot and Piers in praise of Astrea'
'The Dolefull Lay of Clorinda'（スペンサー作？）
'To the Angell spirit of the most excellent Sir Philip Sidney'
'Even now that Care'

5 Philippe de Mornay, *A Discourse of Life and Death*（出版年1590）
Robert Garnier, *The Tragedy of Antonie*（出版年1595）
Sir Philip Sidney, *Arcadia*（編集出版年1593）
Francesco Petrarca, *Triumph of Death*（出版年1599）
The Psalms of David（女王に献呈1600）

6 'The Defence of Poesie' in A. Feuillerat ed., *The Prose Works of Sir Philip Sidney* Vol. III. p.38.

7 この作品はメアリーの訳した *The Tragedy of Antonie* の 'companion piece' として書かれた。Cf. Preface to *Cleopatra.*

8 Geoffrey Bullough ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare,* p.358.

9 フィリップが途中まで訳し，その死後 Arthur Golding が訳を完成させた。
Cf. Feuillerat ed., *The Prose Works*, Vol. III, pp. 185-307.

10 Diane Bornstein, "The Style of the Countess of Pembroke's Translation of Philippe de Mornay's *Discours de la vie et de la mort.*" In *Silent But for the Word,* p.134.

11 *PLMA* 27, p.61.

12

Simon van de Passe： National Portrait Gallery 蔵

13 150篇ある詩編すべてがダビデの作あるいはダビデに関わる詩だとは考えられないが，当時はそのように思われていた。

14 フランスでとくにユグノーの人々が詩編を自分たちのデモンストレイションの際，うたいつつ歩いたといわれる。またその影響を受けてロンドンのセントポール寺院前で，礼拝後に6000人もの人々が集って詩編をうたった事実も伝えられている。

15 英語の讃美歌の多くが common metre を用いていることは現行の歌集を見ても分かる。リズムにのりやすいのであろう。

16 Cf. Kenneth Muir and Patricia Thompson eds., *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt,* pp.98-125.

17 改革者ベーズについては，アーサー・ゴールディングが彼の宗教劇『アブラハムの犠牲』を英訳（1577）して出版したことや，カルヴァンの注釈付『ダビデの詩編』の英訳本や，ベーズの著作をイングランドに紹介したことなどから，われわれがシドニー兄妹の詩編訳を考える際に，おなじ文化圏にあった人として影響を証拠づけるものとなっているといえよう。

18 ダン自身しばしばダビデの詩編にふれて，その説教の中で，「詩編」のもつ詩的な魅力を強調している。ダン特有のレトリックで詩編は 'verses of love' だと繰り返す。
'They can woo a congregation seduce into faith.' と言っている。
John Kerrigan が *Motives of Woe* (Oxford： Clarendon Press, 1991) の中でダンの説教のもつ 'erotic' な説得力について語り，詩編137篇を挙げて，'complaint' のうたの本質に通じるものについて語っているのを参照。

19 Cf. Feuillerat ed., *The Prose Works,* Vol. III, p. 6.

20 Ringler はメアリーの詩編訳は，兄フィリップの死後引き継がれたというが， Hannay 他多くが，兄妹は早くから共同の研究と作業をすすめていたとしている。
Cf. William A. Ringler ed., *The Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford： Clarendon Press, 1962) p.501.

21 Cf. Hannay. *Philip's Phoenix,* p.84.

22 Coburn Freer, 'The Countess of Pembroke in a world of words', p.46.

23 Rathmell ed., pp.343-355.

24 文献参照。

〈参考文献〉

(A) 作品

Bornstein, Diane ed., *The Countess of Pembroke's Translation of Philippe de Mornay's Discourse of Life and Death.* (Michigan Consortium for Medieval and Early Modern Studies, 1983)

Cerasano, S. P. and Marion Wynne-Davies eds., *Renaissance Drama by Women : Texts and Documents.* (London : Routledge, 1996)

Hannay, Margaret P. et. al. eds., *The Collected Works of Mary Sidney Herbert, Countess of Pembroke,* 2 vols. (Oxford : Clarendon Press, 1998)

Rathmell, J. C. A. ed., *The Psalms of Sir Philip Sidney and the Countess of Pembroke.* (New York : New York U. P., 1963)

Sidney, Mary, *Antonius.* (1595) In *Narrative and Dramatic Sources of Shake speare.* Ed. Geoffrey Bullough, Vol.5. (New York : Columbia U. P., 1966)

Travitsky, Betty S. et. al. eds., *The Early Modern Englishwoman : A Facsimile Library of Essential Works* Part 1 : Printed Writings, 1500 - 1640. 10 vols. (Scolar Press 1996)

Vol.6. Gary F. Waller ed., *Mary Sidney Herbert, A Discourse of Life and Death. Antonius.*

Waller, Gary F. ed., *The Triumph of Death and Other Unpublished Poems by Mary Sidney. Countess of Pembroke.* (Salzburg : U. of Salzburg P., 1977)

Young, Frances B. ed., *The Triumph of Death translated out of Italian by the Countess of Pembroke. PLMA* 27. 47-75.

(B) 作家および周辺

Brennan, Michael G., *The Patronage in the English Renaissance : The Pembroke Family.* (London : Routledge. 1988)

Duncan-Jones, Katherine, *Sir Philip Sidney, Courtier Poet.* (New Haven : Yale U. P., 1991)

Hannay, Margaret P., *Philip's Phoenix.* (New York ; Oxford U. P., 1990)

Waller, Gary F., *The Sidney Family Romance.* (Detroit : Wayne State U. P., 1993)

(C) 研究・批評

Beilin, Elaine, *Redeeming Eve : Woman Writers of the Renaissance.* (Princeton : Princeton U. P., 1987)

_____, "Current Bibliography of English Women Writers, 1500-1640." In *Renaissance Englishwoman,* 347-60.

Crawford, Patricia, *Women and Religion in England 1500-1720* (London : Routledge, 1993)

Diehl, Huston, *Staging Reform, Reforming the Stage : Protestantism and Popular Theatre in the Early Modern England.* (Ithaca : Cornell U. P., 1997)

Ferguson, Margaret W. et. al. eds., *Rewriting the Renaissance.* (Chicago : U. of Chicago P., 1986)

Fisken, Beth Wynne, "Mary Sidney's *Psalmes* ; Education and Wisdom." In *Silent But for the Word,* 166-83.

Hannay, Margaret P. ed., *Silent But for The Word*. (The Kent State U. P., 1985)

_____, "'Doo What Men May Sing' : Mary Sidney and the Tradition of Admonitory Dedication." In *Silent But for the Word*, 149-65.

_____, "'Princes You as Men Must Dy' : Genevan Advice to Monarchs in the Psalms of Mary Sidney." *English Literary Renaissance* 19 (1989), 22-41.

King, John. *English Reformation Literature : The Tudor Origins of Protestant Tradition.* (Princeton : Princeton U. P., 1982)

Krontiris, Tina, *Oppositional Voices : Women as Writers and Translators of Literature in the English Renaissance.* (London : Routledge, 1992)

Lamb, Mary Ellen, *Gender and Authorship in the Sidney Circle.* (Madison : U. of Wisconsin P., 1990)

_____, "The Countess of Pembroke's Patronage," *English Literary Renaissance* 12 (1982), 162-179.

Lewalski, Barbara Kiefer, *Writing Women in Jacobean England.* (Cambridge, MA : Harvard U. P., 1993)

Roberts, Josephine A., "Mary Sidney, Countess of Pembroke. Part II," *English Literary Renaissance* 14 (1984), 426-439 [bibliography] .

Schleiner, Louise, *Tudor and Stuart Women Writers.* (Bloomington : Indiana U. P., 1994)

Stranznicky, Marta, "Profane Stoical Paradoxes" ; The Tragedie of Mariam and Sidnean Closet Drama. *English Literary Renaissance* 24 (1994), 135-53.

Waller, Gary F., *Mary Sidney, Countess of Pembroke : A Critical Study of Her Writings and Literary Milieu.* (Salzburg : Institut fur Anglistik und Amerikanistik, 1979)

_____, "Struggling into Discourse : The Emergence of Renaissance Women's Writing." In *Silent But for the Word,* 238-56.

(D)『ダビデの詩編』関係

de Bèze, Théodore, *The Psalmes of David.* Tr. Anthony Gilby (1581) STC 2033

The Bible in English. CD-ROM (Chadwyck-Healey, 1997)

Calvin, Jean, *The Psalmes of David with Commentaries.* Tr. Arthur Golding STC 4395

Campbell, Lily B., *Divine Poetry and Drama in Sixteenth - Century England.* (Cambridge : Cambridge U. P., 1959)

Freer, Coburn, "The Countess of Pembroke in a world of words" *Style* 5 (1971), 37-56.

Hannay, Margaret P, "House - confinèd maids" : The Presentation of Woman's Role in the Psalms of the Countess of Pembroke," *English Literary Renaissance* 24 (1994), 44-71.

Lewalski, Barbara Kiefer, *Protestant Politics and the Seventeenth Century Religious Lyric.* (Princeton : Princeton U. P.,1979)

Martz, Louis. *The Poetry of Meditation.* (New Haven : Yale U. P., 1954)

Sternhold and Hopkins, *The Whole Book of Psalms.* (Old Version, 1569) STC 2440

Waller, Gary F., "'This Matching of Contraries' : Calvinism and Courtly Philosophy in the Sidney Psalms," *English Studies* 55 (1974), 22-31.